文化・芸術

「作品」

1950年　フォトデッサン、印画紙
27・0チセン×21・0チセン

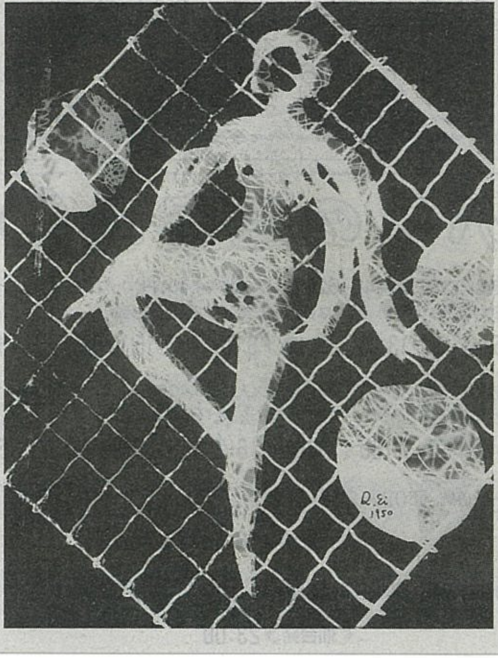
瑛九（1911～60年）

球体とともに軽やかに存在する裸体。よく見ると異なった素材の重なりで構成されており、人体の奥行きや動きの残像をも感じさせます。

瑛九（本名杉田秀夫）は、当時日本に紹介され始めていたシュールレアリスムに影響を受けながら、油彩や水彩などそれまでの表現手法に懐疑を抱き始め、やがて感光材料に興味を持ちました。

1930年からフォトグラムという、印画紙の上に直接物体を乗せ上から光をあてて現像する技法の試作を開始、「フォトデッサン」と名付けました。工程にネガを挟まない直接操作の感覚が絵画創作に似ていたからでしょう。瑛九はエスペラント語を学ぶなど常に世界の広がりを意識し、しかも世界の先端に立っているモダニストでした。

人ではない物体が人として「描画」される。

当時は一部から注目されたにすぎませんでしたが、現在では、瑛九の表現の先駆性が高く評価されています。（池田）

〈名画の扉〉　大川美術館企画展から